

舞台美術家・エッセイスト

妹尾河童 さん

「戦争の本は売れない」、「子供は活字の本は読まない」という出版界の2大ジンクスを破り、300万部を超すベストセラーとなった『少年H』。初めて書かれた小説『少年H』を著作したきっかけ、著作上の工夫などを河童さんにうかがった。

(聞き手・構成：町田 弘香)



— 河童さんとお呼びしてよろしいでしょうか。

どうぞ。僕は弟子にも先生と言わせません。誰とでも目の高さを同じにして付き合いたいのです。

— 河童というのは、本名なんですね。

親がつけた名前は「肇」だったのですが、20歳ごろから「河童」としか呼ばれなくなったので、家庭裁判所に改名を願い出て、本名にしてもらいました。知人の弁護士も「無理だと思う」と言いましたが、大変でしたね。裁判官に「戸籍の改名が許されるのは、珍奇な名前でも社会生活に困っている人を救うためのもので、まともな名前を珍奇な名に変えた判例はない」と言われました。でも20年近く通用し社会的にも認知されていたことが理解され、1971年7月に、「申立人の名を『河童』に変更することを許可する」と。

— ところで河童さんの本職は、舞台美術家なのにエッセイの著作も多いことで知られていますが、『少年H』という小説もお書きになっていますね。書こうと思われたきっかけは何だったのですか。

最近、「戦争の時代が風化している」と言われていますが、無理もないですよ。60年もたてば遠い昔のことになりますから。体験した人もどんどん少なくなっているし…。戦争が始まった時、僕は小学校5年生

で、終戦時は中学3年生。子供ながらに戦争がどんなものか体験しました。住んでいた神戸の街が空襲で見渡すかぎりの焼け野原になり、僕の家も焼け落ちました。その悲惨さを、次の世代に伝える義務があると思っていたんですが、『伝える』というのは実にムズカシイ。真正面から「戦争は悲惨だ」と叫んでも、それは『伝えたつもり』にすぎなくて、相手に何も伝わってはいませんか。僕は書き残すなら、子供も読めるように書きたいと思った。親しい3人の編集者に相談したら、皆同じことを断言したんです。「『戦争の本は売れない』、『子供は活字の本は読まない』というのが出版界の2大ジンクスで、これを破るのは絶対に無理ですよ」と……。

— でも書かれましたね。そして300万部というベストセラーになり、国語の教科書にも掲載されている。「無理だ」と言われたのに、どんな決意や成算があったのですか。

僕はヘソ曲がりだから「絶対に無理」と言われると、「じゃ、やってやろうじゃないか」と思う。戸籍名を「河童」に変えた時のようにね(笑)。

— 子供にも読めるようにされた工夫というのは？

5つのことをやってみようと考えました。それでもダメだったら、2大ジンクスとやらを認めるしかないよね。

戦争が始まった時、僕は小学校5年生。子供ながらに戦争がどんなものか体験しました。だから、その悲惨さを次の世代に伝える義務があると思っていたんです。



小学生時代の河童さん。「肇」の頭文字「H」を編み込んだ母親の手編みのセーターをいつも着ていた。

1つ目は、「老人の思い出話にしないこと」。あの時代に生きた少年が、見たこと、聞いたこと、感じたことを書こう。それも子供の目の高さで書く。そうすれば今の少年少女も自分と「同じ年頃の子の話だ」と思ってくれるだろうとね。

2つ目は、あの時代が異常な時代であったことを正確に伝えなくてはならない。でもそれを資料のように年月日の羅列にするのを避け、当時の街の様子や、親子の対話、友人たちとの学校での交流や、どんなものを食べていたかを書いて、伝えようとした。その方が、あの時代がハッキリ判るだろうと思ったのでね。本当に今の人には「エッ」と思われるような時代だったんですよ。

— 3つ目に気をつけられたことは？

登場人物をできるだけ実名で書くこと。実名で書くと、勝手なことが書けない。本になったとき「僕はそんなこと言っていないよ」では困るから、名前が出ている人には書いている途中に原稿を送って「事実誤認があれば訂正してほしい。また思い出したことがあれば教えてくれ」と頼みました。お蔭で友人たちの協力も得て、あの時代のリアルさがより出ました。

4つ目は、読者に「こんな分厚い本を読むのか」という苦痛を感じせないようにしようと思った。上・下巻で700ページの分厚い本を子供に渡して「読んでみて」と言うのは無理ですからね。そこで、15分で読み切れる短編のように書きました。どの章も、42字×214行に書くことに統一したんです。約9000字ですが、この分量だと子供でも楽に読める。気がつくとも50章の長編を読み終わっている仕掛けです。

5つ目は、子供にも読んでもらうために漢字には全部ルビをふり、文学的なムズカシイ表現をしないように気をつけました。

— そのような努力の結果がベストセラーになる要素と結びついたのでしょうか、子供からの反響も多かったんですか。

読者カードが6000通ほど貯まったとき、年代別にカードを分類してもらいました。それで、今までの僕のファン層とは違うことが判った。僕の読者は20代から30代の女性がほとんどでグラフにすると『山型』だったのに、今回は10代から90代までの各年代に読まれ

ていて『台地型』だったんです。何より嬉しかったのは20代より10代の子のほうが多かったこと。小学3年の子のカードには「Hは4年生まで寝小便をしていたのですか？ぼくは1年生でヤメました。フッフッフ」と書いてあった（笑）。20代の女性からは「戦争ってなんだったのか、ということがよく判った」というのが多かった。伝えるための工夫をしたことは無駄ではなかったと思いました。

— 憲法9条の改正について、意見がありますか。

『少年H』を書いたのも、2度と戦争が起こらないようにという願いを伝えたかったからです。だから、戦争に向う道を歩かないためにも、第9条は絶対に守らなくてはなりません。

— 弁護士や裁判所に対するご意見があれば、お伺いしたいのですが。

裁判員制度の導入も予定されているし、今後は、まず普通の人にもわかる言葉でやりとりしてほしいですね。言葉も聴こえるように喋ってほしい。公正な裁判が行なわれていることが、人々に伝わるのが大事ですから。

プロフィール せのお・かつば

1930年神戸生まれ。1954年舞台美術家としてデビュー。テレビ美術や映像デザインの分野でも活躍。フジテレビ美術部に22年間在籍し、ミュージックフェアのセット美術で第1回伊藤嘉翔賞テレビ部門を受賞。エッセイストとしても知られ、緻密な手書きイラストで人気のある「河童が覗いた」シリーズなど著書多数。ひとりの少年が見た戦争の様子を描いた自伝的長編小説『少年H』は毎日出版文化賞・特別賞を受賞。300万部を超えるベストセラーとなり、日本のみならず、台湾、韓国、アメリカなどでも出版されている。